



## 黒いダイヤのビジネスモデル

夏の昆虫といえば代表的なのがカブトムシとクワガタ。子供の人気を二分するこれら2種類のムシはあまり関心がない者からすると単に角の形が違うだけ、と映るかもしれないが、これらを愛好する者からすると実は「似て非なるもの」なのである。

その証拠に店頭に行って両者の値段を比べてみれば、違いは一目瞭然である。カブトムシは立派なお金の成虫でも一匹1,000円もしないが、クワガタとなると一桁違ってくる。特に人気が高く「黒いダイヤ」とも言われるオオクワガタでは小型のもので数千円、大型のものになると1万円~数万円になる。

この値段の差はどこからくるのか。飼育経験がある者であれば誰でも知っていることとして、第一にカブトムシは一夏の寿命であるのに対して、クワガタは数年生きるという違いがある。カブトムシの成虫は

高々2~3ヶ月しか楽しめないのに対して、クワガタはその10倍も楽しめるということである。

また、幼虫から成虫へと育成するのにかかる手間だけを考えてもかなり違う。カブトムシでは腐葉土の入った容器に適当に何匹かの幼虫を投げ込んでおけば自然と育つが、クワガタではそうはいかない。そもそもクワガタの幼虫はカブトムシと違って朽木を食べるので餌の入手に手間とコストがかかる上、幼虫同士が喧嘩しやすいということもあって一匹ず

つ分けて育てなければならないのである。

本来の希少性に加えてこのような飼育にかかるコストがクワガタの値段をカブトムシの数倍から10倍以上に保っているのである。しかし、実は現在のクワガタの値段もこの10年間で約10分の1に低下した結果なのである。価格下落の主たる原因は飼育方法の技術的革新である。ショップの店頭でも良く目にする「菌床ビン（あるいは「菌糸ビン」とも呼ばれる）」はクワガタの幼虫が好むヒラタケ系のき

のご菌を培養したビンで、これを使うと素人でも簡単にオオクワガタを飼育できる。

では、この方法で1万円以上のクワガタを量産すれば一つのビジネスになるのではないかと、そう素人は考えるかもしれないがそれほど容易ではない。菌床ビンは通常1,000円~2,000円はするが幼虫が成虫になる

までの間に最低3ビンは必要である。餌代だけで5,000円は下らない。これだけのコストをかけても温度管理なども大変で、必ず1万円級が作れるという保証はない。リスクが伴うのである。

これに気づかず、せっせと高い餌台を払ってクワガタの育成に勤しむ人が増えれば、それだけ菌床ビン業者が儲かる。成虫ではなく餌を売る、どうやらこの業界、そのようなビジネスモデルが中軸にあるようだ。 (小粥 泰樹)

